

The background of the cover is a photograph of a tree trunk with rough, dark bark. Two light pink cherry blossoms are in focus on the right side. In the upper left, there is a blurred view of more cherry blossoms and a building with orange and blue walls under a clear blue sky. A small white butterfly icon is positioned near the top left of the tree trunk.

としよ
かんぽう 40

Tohoku Fukushi University Library News 40

「訂正する」姿は見られ、 試され

総合福祉学部社会福祉学科

准教授 清水冬樹

『訂正する力』(朝日新書) 東浩紀 朝日新聞出版 2023.10



今から20年近く前、まだ評者が都内の大学院修士課程に在籍していた頃、研究の展開のあり方がほとんどわからず、修士論文から逃げつつも、多くの本を読み更けていた。そんなときに東浩紀氏の『存在論的、郵便的: ジャック・デリダについて』に出会った。もちろん当時は読みこなすことはほとんどできなかった(今も)。しかし、「誤配」というキーワードにはなぜか惹かれるものがあった。

「誤配」とは間違った宛先に届き、間違って理解されることといった意味であり、著者がジャック・デリダの議論から抽出したものである。そして、「誤配」はただの誤りではなく、そもそも思考をずらすことなく、伝達されたものを新たな知と関係性として取り入れ、さらなる物語を示していくことと理解される。

著者はこの「誤配」をさらに深め、本書において「訂正する力」とし、その意義について現実社会のありようと重ね合わせながら議論を展開する。「訂正する力」とは、「過去との一貫性を主張しながら、実際には過去の解釈を変え、現実に合わせて変化する力」としている。残念ながら諸外国ではこの訂正する力を発揮しながら人々が暮らしている中、日本ではこの訂正する力が十分に発揮されていないというのが著者の本書を執筆したきっかけの1つであるとしている。言葉こそ示されていないが、いわゆるキャンセルカルチャーなどを例に上げながら、訂正できない私たちの時事について述べられている。

本書の構成は次の通りである。「はじめに」では、「訂正する力」がなぜ現代において必要なのか著者自身の議論の出発点が示されている。第1章では「訂正する力」が時事の中でどのように展開されているか／されないのか具体的に示している。第2章では「訂正する力」の意味について、理論的背景をウィトゲンシュタインをはじめとする思想家らの議論を踏まえながら辿っていく。第3章では「訂正する力」の实在に

ついて、著者自身の実践を手がかりに論じている。第4章は日本において「訂正する力」がどのように展開させることができるか、著者なりの挑戦的な議論が展開されている。

様々な論点を私たちに提供してくれる本書であるが、評者は自身の身の回りにおける「訂正する力」について考えたい。

「訂正する力」を、私たちはどうしたら実践できるか。各々が日頃の活動や研究、学業への向き合い方等を「訂正」していく他ないようにも考えられそうだが、評者はこうした取り組みを著者が取り組んだようなミクロ・マクロレベルで捉えるのではなく、メゾレベルにおいても検討する必要性をみる。端的に言えば、私たちは「訂正する」ことを日常的に取り組み、その姿が見られる対象であるということを意識しなければならないということである。

評者が専門とすることも・若者支援の視点からみるとわかりやすい。この世代はロールモデルに出会うことで、新たな価値や所作を獲得していく。彼らのあこがれとなる存在として私たちは位置づいているだろうかということを問うてみたい。

少なくとも評者が目にする組織の大半はトップダウン、あるいは前例踏襲であるものがほとんどであり、中には泥舟の中の椅子取りゲームをしているようにも見受けられる。それまでの取り組みを訂正しながら、新たな実践や価値を見出していくという本書が重視する取り組みとは程遠い。訂正できない私たちの姿を、若い世代はあらゆる角度から目の当たりにしているとしたら、おとなになっていくことにどういった希望や期待を持つだろうか。「訂正する」姿は、見られ、試されていることを念頭に置かなければならない。

本書は、直ちに大きな社会変革を求めることは不可能に近いということを「はじめに」で述べている。その理由は、国も含めたあらゆる組織は、「維持する」という業務を意識しなければならず、大きな変革は条件的にも難しいという。地道かもしれないが、時代や社会情勢が移りゆく中で、私たちの実践はその変化の中で取り組まなければならない。小さな変化の積み重ねを著者は「訂正する力」としているが、この小さな変化は大きなうねりにつながっていく。こうしたストーリーを若者たちへ身近なところで示していくことが、私たちおとなの責任として求められることのように思われる。

鎌倉時代の 『マトリックス』

余研
瀝究

仏教専修科/仏教文化研究所 特任准教授
早川 祥賢

『マトリックス』という映画があります。第一作は 1999 年公開ですので、もう四半世紀も前のものです。二、三年前に四作目が出たようですので、学生みなさんもご存じかもしれません。キアヌ・リーブスが垂直の壁の上を走っている、あの映画です。いきなり余談になりますが、私は妻が上の娘を妊娠していた時にふたりでこの映画を観に行きました。黒装束のキアヌが壁をドドドッと走り始めた時に、妻の腹の中の赤ん坊と一緒にドドドッと腹を蹴り始め、妻が「うわーっ」と声を挙げたのを今でも覚えていています。

さてこの映画ですが、実は単なる SF 映画ではなく、一種の哲学的問題を含んだもののなのです。ごくわかりやすく言うと、それは「現実とは何か」という問題です。それでまず少し、『マトリックス』のストーリーと基本的な設定をごく簡単に説明してみましよう。主人公のネオ(キアヌ・リーブス)はインターネットの裏世界にどっぷり浸って暮らしているハッカーなのですが、この世界に対して漠然とした違和感を感じています。彼にはこの世界が何か夢のようなものを感じられていたのです。ところがある時、彼はモーフィアスという男に出会い、「君の生きているこの世界は、実はコンピューターによって作られた仮想世界なのだ」と知らされます。そしてネオはモーフィアスによって「この世界の外」へと連れ出されます。そこでネオが見たのは、「この世界」の本当の現実です。実は 21 世紀の後半に人類と人工知能の間で戦争が起き、人類のほとんどは培養器の中に閉じ込められてコンピューターの動力源にされてしまっていました。そして人工知能は「マトリックス」と呼ばれる仮想世界を作り上げ、培養器の中で眠っている人間たちの意識だけをデータ化してその仮想世界にアップロード

していたのです。つまり、ネオがそれまで「われわれが生きているこの世界」と思っていたものは現実でもなんでもなく、仮想世界の中でわれわれが見ている夢にすぎなかったということです。ネオはモーフィアスたちと共に人工知能と戦う決心を固め、冒険が始まる——と、大体こんなところです。

『マトリックス』を観た後、私の心の中には何か奇妙な感覚が残りました。私がもし仮想現実の中にいるのだとしたら、それは一体どういうことなんだろう。「私」は目の前の椅子や机や樹々や花を見て、「ああ椅子だな」とか「ああ花だな」と考えます。しかし、実際にはその椅子や花は存在していません。ただのシミュレーションです。それだけではなく、その存在しない椅子や花を眺めている「私」すらも実際には存在していません。ただのシミュレーションなのです。我思う、ゆえに我…なし？

前置きが長くなりましたが、『マトリックス』を観てから二十年近く後のある日、私は道元禅師の『正法眼蔵』を読んでいました。その時突然、私の眼は次の行に釘付けになりました。

いはゆる経巻は、尽十方界これなり。経巻にあらざる時処なし。

これは『正法眼蔵』『仏経』巻の一節です。現代語訳は次のようになります。

ここに言うところの「経巻」とは、世界全体のことである。いかなる時点・いかなる場所であろうとも、経巻にないものはない。

この文を読んだだけでは、何のことだかわからないかもしれません。実は、道元禅師はここで、「われわれが生きているこの世界はひとつの巨大な経典なのだ」という世界観を提示しているのです。——「それがどうしたの」と思うかもしれませんが、よく考えてみて下さい。もしこの世界がひとつのお経なのだとしたら、われわれはそのお経の中の登場人物だということにならないでしょうか？これは『マトリックス』と同じ

世界観なのではないでしょうか？マトリックスの仮想世界がソフトウェアのソースコードから生成されているように、われわれのこの世界もお経というソースコードから生成されている——道元禅師の言葉をわれわれはそう解釈することができるのではないのでしょうか。

これは奇想天外な話に聞こえるかもしれませんが、私の考えるところでは、道元禅師がこのような世界観をもっていたということは十分にあり得ることです。学生の皆さんは「禅のこころ」の授業で般若心経を読んだことがあるでしょう。般若心経には「色即是空」という言葉があります。これは「この世界の中にあるものはみな空である」という教えです。「空である」とは、「実体がない」というほどの意味です。しかし、「ものには実体がない」というのはどういうことなのでしょう？「自分自身が実体をもたない幻である」という状態を、皆さんは思い描くことができますか？

論理的に考えて、この問題に答える方法はひとつしかありません。それは、この世界を仮想現実だと考えることです。

別の視点から見れば、これは「般若心経が提示した問題に、道元禅師が答えた」ということなのです。般若心経が問いかけたのは、「この世界の中にあるものはみな空である。君はこれを思い描くことができるか？」という問題です。千年の間、この問題に明確な形で答えられる人は誰もいませんでした。しかしついに、鎌倉時代の日本に道元禅師が現れて、「できる。『私自身が〈この世界という物語〉の登場人物なのだ』と思い描けばよいのだ」と答えたわけです。見事な答えだと思いませんか？

実を言うと、道元禅師がこの思想によって解決した問題はこれだけではありません。道元禅師はこの考え方によって大乘仏教の大統一理論を構築しようとしていたのではないかと、私は考えています。しかしそれは学生の皆さんには少し難しすぎる話でしょう。しかし、もし機会があったら映画『マトリックス』の第一作を観てください。素晴らしい映画です。

電子書籍派に なってみた。

こんにちは。実は私、プライベートではほぼ完全な電子書籍派です。私がはじめて買った電子書籍は『空想お料理読本 2』という本でした。2011年1月28日のことです。電子書籍って Amazon Kindle のようなアプリで

電子書籍を購入し仮想本棚に追加されるという方式が主流ですが、当時は、1冊の電子書籍がひとつのアプリになっていました。この本、紙の単行本だと料理の様子が録画されたDVDが付いていまして、電子書籍だとそれがクリックひとつで動画再生され、電子書籍ならではの利便性だと感動したものです。しかし、これで電子書籍派になったわけではありません。その後も、たま〜に電子書籍を購入するもののスマホの容量、充電の消費、通信費、画面サイズなど多様な要因によりほぼ完全な紙の本派で生きていました。

2019年、本格的に電子書籍派になろうと思い立ちタブレットを購入しました。全くうまくいきませんでした。というかそもそもこの頃は出産&育休を経て身体的にも環境的にも読書という行為自体ができなくなっていたのがあります。2021年、2022年、2023年と3年連続サイズ違いでタブレットを買い、毎日持ち歩き、読み放題のサブスクに課金し、それでもなかなか電子書籍派になりきれないある日、ネットでこういう意見を目にしました。「電子書籍でも^{ふんどく}積読する」。自分の頭の中が切り替わるのをハッキリと感じました。データというモノがない電子書籍を買って読まないなんて何も手元に残らない100%損な行為だと思っていたのです。そのため実際に購入するまでかなりの吟味を重ねていました。でも違うのです。電子書籍でも買って読まなくていいんです。積読を紙の本で許容するなら電子書籍でも許容しないといけなかったのです。それからとにかく量を買うことで一気に電子書籍派になれました。ちなみに2024年は、5月末時点で50冊買っていました。読了率は60%程度です。

さて、私がはじめて買った電子書籍『空想お料理読本 2』今はもう読めません。アプリがOSのアップデートに対応しなくなりダウンロードできなくなったからです。こういう経験を踏まえて残したい本は紙と電子の両方を買っています。あと電子書籍で買うと、家族に継承できない問題もありますね。親の本を子どもが読むという機会が失われます。残す・共有するに関しては紙の本が圧倒的に優位だと思っています。ということで最近買った紙の本は、うちの子どもも大好きな『異種最強王図鑑天界頂上決戦編』です。

(図書館 堀慧子)



第6回

令和の時代を生き残れ！

Do it yourself！

ダイジェスト版



子金治

減っちゃったじゃん！



コイケ

減りましたね。



3人でやるのが、“鼎談”なのよ？2人じゃ対談じゃん！！



誰か、スカウトしてきます？



みんな忙しいしな…



じゃあ、公募はどうです？



バンドじゃないんだから。



まあ、応募者がたくさん来て鼎談どころか座談会、いや、セミナーになっちゃうかもしれませんね。



話がきな臭くなってきたな…



まあまあ。でも公募はいいんじゃないですか？いつの時代も一定程度行われていますし。一大ジャンルですよ。



まあ、専門の雑誌もあるしね。



子金治さんの呼びかけで、職場のみんなでお茶の俳句に応募したとありましたよね。



あったね！あれ、取りまとめたのが私だから、いまだに応募開始の時期にメールくるよ。



本当にいろいろあって面白いですね。私も過去にさくらんぼの新品種の命名とか、ねこ頭型土製品の愛称とかに応募したことがあります。



図書館業界もキャラクターの名前とか新館の愛称とか公募されているよね。



そうですね。うちの図書館キャラクターのぷくてんも学生からの公募でしたしね。



公募とはちょっと違うけど、最近はネーミングライツとかクラウドファンディングも盛んだよね。



宮城県だと富谷市の図書館がクラファンしていましたね。



私、滋賀にある江北図書館の修繕プロジェクトのクラファンに応募したよ。



それはいくらで、リターンは何だったんですか？



3000円で、その図書館の歴史とかを記した冊子もらった。



クラファンすると、資金調達もできるし話題にもなって一石二鳥の面がありますよね。



やっぱり今の時代、存在をアピールすることが何事においてもキーポイントになりますからね。



そう考えるとやっぱり私たちも何か公募的なものをした方がいいかもしれませんね。

急にバズるし
にを企...き
にならなければよいが...

Webにつづく



かんのん 像



誰かしら？
シリーズ 2

学内には2体の‘福祉観音’が安置されているのをご存じだろうか？

1体は管理棟1Fに、そしてもう1体は学食入口に安置されている。管理棟の福祉観音は明治43年に、学食入口の福祉観音は昭和48～50年あたりに作られたよう…。‘よう’って、つまり2体に共通している点は、いつどういう目的で作られ、なぜ福祉観音と命名されたのかきちんとした記録が残っていないこと！「書き残すことがいかに大切か」を痛感しますよね。学食入口の福祉観音にいたっては、その台座に建立年や建立者名が一切刻まれておらず、謎は深まるばかり。

さて、本学には大学の沿革を記した書物が2冊ある。『梅檀学園壹百年史』とその後に書かれた『十五年のあゆみ』である。これを手がかりに調査を開始するも、福祉観音についてののは『十五年のあゆみ』の次の記述のみ。昭和48年に現在の三号館の前進である二号館が建設され、昭和49～50年にかけて福聚殿や現在の三号館が完成、その際構内の美化が行われた。「一号館前の広場から、福聚殿に至る通路を中心として、これに連なる通路の両側には、庭園化の工程が進み、(中略)特に中心通路から、第二、第三校舎に至る通路の分れ道には、円形の一廓があり、低い緑の木々に囲まれて、**青銅の福祉観音像が安置され、やさしい微笑をたたえて見守って下さる。**」とこれだけ。こちらは現在の学食側にある福祉観音についての記述とみられ、昭和48～50年あたりに構内の整備が行われた際に作られたものと思われる。当時は今の音楽堂に福聚幼稚園があり、登園する園児が福祉観音に挨拶する姿が見られたとのこと、この心温まるエピソードを教えてくださいましたのは、以前図書館の次長を務められた石田信孝氏。さらに石田氏によると、図書館前にスロープ階段が整備された時期に、学食入口に福祉観音は移動&安置され、その際観音が錆びていたので修繕に出した記憶があるとお話(台座の刻印が消されたのはこの時か?)、貴重な情報ありがとうございました。

これより前に作られた管理棟1Fの福祉観音の台座には記録がある。向かって左側には、寄附として「梅檀学園 東北福祉大学後援会、高等学校父母文部会、附属幼稚園母の会」とある。右側には「昭和四十三年霜月三日建立、学園長大久保道舟誌」、昭和43年

11月3日に第二代学園長の久保道舟氏によって建立されたものだということがわかる。しかし作られた目的や命名のいきさつなどの記録はなく、上記の資料及び石田氏からの情報によると、昭和43年に着任された久保道舟氏は大学の発展に多大に尽力された方、仏教学者だったために、大学と福祉の発展を願って観音は作られ、命名されたと推測されるのである。また、図書館には「東北福祉大学付属高等学校 学校日誌」なる資料がある。昭和43年度の11月5日(火)の記述には、「事務局棟に福祉観音像安置する」とのみあり、実際に大学に安置されたのは建立日より2日後だったことが伺える。当日の日直の担当で日記を書いたと思われる人物にも問い合わせたが「わからない」との回答、これ以上の情報は得られず実に残念な結果となったのである。

さらに残念なのは、『十五年のあゆみ』に掲載されている福祉観音の写真は事務局棟1Fのもの、でも実際にこの資料に取り上げられているのは学食入口にある福祉観音、写真と内容がミスマッチであり、こうやって誤った歴史が伝えられていくという事実!?を目にしたのである。しかし、しかし！である。昭和58年刊行の『目でみる二十五年のあゆみ』(東北福祉大学発行)なる資料を見ると、一枚だけ謎の写真が掲載されている。「福聚殿を背景にした福祉観音」というもの、ここに写っている観音は事務局棟1Fにある福祉観音、だが同じ位置の他の構内写真に写るのは学食入口にある福祉観音と思われ、???な事実が発覚したのである。オーマイグットネス…。

記録は大事、改めてこの事実を実感した出来事であった。100年後には「福祉観音は夜な夜な入れ替わる」なんて七不思議が本当のこととして伝わっているかもね。図書館ではこれからもこの案件を追っていかうと思います！

to be continued……

写真左・右『目でみる二十五年のあゆみ』より

(図書館 八巻千穂)



合理的配慮からうまれる 共生の環

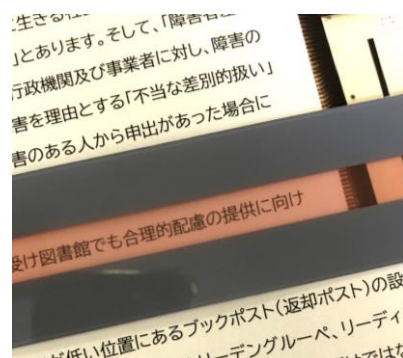
令和3年に障害者差別解消法が改正され、事業者による障害のある人への合理的配慮の提供の義務化が令和6年4月1日より施行されました。内閣府作成のリーフレットには、「障害のある人もない人も、互いにその人らしさを認め合いながら、共に生きる社会(共生社会)を実現することを目指す」とあります。そして、「障害者差別解消法」では、行政機関及び事業者に対し、障害のある人への障害を理由とする「不当な差別的扱い」を禁止し、障害のある人から申出があった場合に「合理的配慮の提供」を求めることを通じて、「共生社会」を実現することを目指すとしています。

これを受け図書館でも合理的配慮の提供に向けた準備を進めてきました。「としかんぼう」39号の「鼎ダーン」でも紹介しましたが「りんごのたな」の新設や返却口が低い位置にあるブックポスト(返却ポスト)の設置(本館&分室)、点字表記の見直し(貼り直し)、筆談ボードやリーディングループ、リーディングトラッカーなどをそろえました。安心して利用できる図書館となるべく、モノだけではなくソフト面での支援もさらに充実させていきますね。支援が必要な場合は、遠慮せずに図書館スタッフに声をかけてください。そして、互いの対話を通して、「共生できる図書館」が実現できるよう努めてまいります。

※サービスの詳細は、東北福祉大学図書館ホームページ 〉 利用方法 〉 障がいのある方

今回のブックレビューは清水冬樹准教授に、そして研究余瀝は早川祥賢特任准教授にご寄稿いただきました。ご協力、誠にありがとうございました。

ウェルコム21の分室も合理的配慮のためレイアウトを変更、またリーディングトラッカー等の備品も用意しました。その他、国立国会図書館の「視覚障害者等用データ送信」を受け取ることができる図書館にも承認されましたので、こちらも併せてご利用ください。



図書館
HP

(図書館 八巻千穂)